

行圓上人木像の由来

佐藤 正映

京都にある西国三十三ヶ所観音霊場第十九番札所「革堂行願寺」の創建は、寛弘元年（一〇〇四）十二月十一日で、『日本紀略』に「今日一条北边堂供養 行円皮聖建立之」、また『百練抄』には「十二月十一日 行円皮聖供養一条北边堂 行願寺是也」と明記されています。寛弘元年は平安時代で、今からざっと九九四年も以前のことです。

この行願寺には、縁起を物語る「拾九番革堂行願寺和讃」があります。

西国三十三ヶ所の 第十九番の御霊場は
一条革堂行願寺 抑々由来を尋ぬるに
人皇六十六代の 一条院のおん時に
寛弘二年の建立で 其の開山の行圓は

豊後速見の住人で 鎌足公の末孫で
渡世の業はなけれ共 常に狩りをば好みける
或る日女鹿を追出し 得たりと弓に矢を番へ
切つて放つにこはいかに いかなる手元の狂いけん
女鹿の腹を掠め切る 其の時女鹿が孕みける
子鹿が漏れて出にける 親鹿痛むも構はずに
子鹿の血をばねぶり去り その母親鹿死ににける
その時速見のあきよりは 畜生さえもあの様に
不憫を掛けて子を思う 我が身は狩りの業でなし
一時の業に此のような 不憫の事は出来もせず
是でふつつり殺生を 思い止まり給いける
女鹿の菩提弔らうと 其の身は出家の身と成て
革に陀羅尼の経を書き 衣の上より纏はれて
名を行圓と改めて 諸国修業に出たまう

と思われます。

この物語について、別府にも古くからの伝承があり、故福田紫城先生は「別府温泉・名勝史談」に次のように紹介されています。

「志高湖の東に聳ゆる小鹿山は、平安朝の高僧革聖人、行圓の発心の地であります。聖人は速見の里の人で、若き日狩りを業としました。小鹿山の麓で一匹の雌鹿を見つけ、弓を絞って発矢と放てば、狙い違はずよこ腹を射貫きました。孕み鹿だったので、皮破れて仔鹿が現われました。親鹿は己れが痛手を堪へつつ、悲鳴をあげて仔鹿を舐め廻し遂に敢えなく絶命しました。

聖人は此の光景に感激して、頓生菩提の心を発し、弓矢を捨て仏道に入り、其の鹿の皮を兜巾とし、衣として常に身に着け、千咒陀羅尼を唱へつゝ諸国を修行して歩きました。寛弘元年京都に上がった時も、その俛の姿だったので、都の人々の大評判となり、一条天皇様も革聖人と崇め給ひ、御堂を建て御下賜になり、勅願所と定められました。聖人は故郷の発心の地を記念し、小鹿山行願寺と名づけましたけれど、都の人々

山城の国に出で来り 小川一条に庵を立て
市町修行を致されて 常に観音信じける
或夜の事に夢結び 一人の老神突然と
現れたまいて言うに 汝まことの観音を
得んと思はば下鴨の 神前に立つつぎの木が
是れぞまことの霊木ぞ はやく此の木を観音に
きさみ給えと宣うて 行圓大いに悦びて
早速その木を所望なし 三年三月の日も過て
千手観音なりたまい 御丈八尺立像の
それより行圓上人は 早くも本堂建てんとて
数多信者の有志にて 程なく本堂建立せり
行願寺と名づけしは この上人が一心に
願望成就なしにけり また革堂と名付けしは
革上人が建てしゆえ 霊現実にあたらなり
参詣人は日にたえず あら有り難や観世音

御詠歌

花を見て今は望みの革堂の 庭に千草も盛りなるらん
和讃によれば開山の行圓上人は、豊後の国速見の住人

は革聖人の御堂、縮めて革堂と呼びました。今も京都で名高い一条革堂は、即ち小鹿山行願寺で花山法皇様は、西国巡礼第十九番の霊場と定め給いました。此の物語は、そっくりその倭日本略記、元事釈書、革堂縁起などに載り朝見の古老にも語り伝えられています。」

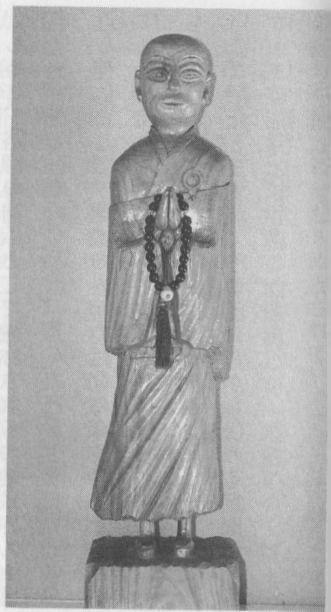
また、『大別府史蹟名勝』(昭和十一年)には、

「京都一条に革上人の革堂とて名高き小鹿山行願寺という古刹あり一条天皇の勅願所にして西国三十三ヶ所観音の霊場なり一条天皇の寛弘元年十二月十一日革上人行圓の創設に係る。(中略)」

此の深刻なる動物母性愛を眼の当たりに見て狩猟士は劇しく感激し、南無頓生の大菩提心を発し、弓や刀をかなぐり捨て、其の鹿の皮を剥ぎ、裏に千咒陀羅尼を書き之を羽織りて仏門に入れり。

爾來行圓は一日として兜巾革衣を脱がず、千咒陀羅尼を誦しつゝ諸国を遍歴す。寛弘元年遂に京都に至。

都の人々行圓を革上人と呼び其の講演を群りきく。徳



行圓上人木像

野仲氏はこの木像を「四国霊場満足行日記」の著者で信心深い叔母の伊藤マサノ女史に預けたそうです。女史は行圓の物語を知らない野仲氏より、小鹿山に近い東山に住む自分のもとに木像がもたらされた奇縁を感じ、ここが修行僧像の安住の地と思われましたが、入魂もせず安置するに忍びず、遠縁にあたる私が奇縁をうけて供養を依頼されました。

修行僧の木像(行圓上人木像)は、平成十一年正月六日に護生院で入魂し、以後当院でお祭りすることになりました。

奇なるかな、千年を経た今年、行圓上人が故郷に現わ

望天聰に達し、一字の道場を賜る。上人は故郷発心の地に因み小鹿山行願寺と號け……」

とあります。

和讃とほぼ同じ内容ですが、地元でも同じように語り継がれていることがわかります。

小鹿山の麓にある志高湖は、この付近に棲む鹿や猪の水呑み場で、また、たくさんの水鳥が群れて羽を休めていました。昔の人々はこの付近を狩り場としていましたので、この湖の岸からときどき石鏃が発見されます。

今では春に菖蒲が綺麗に咲き乱れる神楽女湖など志高湖一帯は、奥別府観光地として年中賑わっています。

行圓が小鹿山の麓で発心したのが行願寺開山の六年前だとすれば、今からほぼ千年前にあたります。

昨平成一〇年六月、由布院町で建設業を営む野仲真一氏(五四才)の夢枕に修行僧が現われました。不思議に野中氏は仏像彫刻の念に駆られたそうです。丁度建築中に残しておいた六寸角長さ二尺三寸の檜材が、程なく修行僧の姿に生まれ変わりました。

れたものと思われれます。行願寺が護生院と同じ天台宗という縁もあったのでしょうか。私は先日京都行願寺に参詣して大僧正中島湛海師に委細を報告しました。

行願寺和讃は節分会に護生院に伝わる玄清法流の盲僧琵琶によって、私が弹奏して参詣する信者に披露しました。

行願寺で湛海師にお会いしたときに、来年の五月に行願寺の千年祭を行なうとのことで、師自ら小鹿山と行圓上人の出生地をお尋ねしたので、小鹿山の土を採取しておいてほしいとのことでした。今年の七月二十四日湛海師一行がお尋ねになり、小鹿山を親しくご覧になり由布院までお供しました。

永祿元年(九八九)夏の台風で鴨川が大氾濫した時の記録に「賀茂上下社、石清水御殿、祇園天神堂、一条北辺堂東西山寺皆転倒し……」とあります。革堂一条北辺堂は著名な神社と並ぶほどの存在として重んじられていたのです。この革堂行願寺の縁起となる行圓上人が発心した小鹿山の伝説は、是非こどもたちに語りついで行きたいものだと思います。